

昭和四十六年六月一七日

第三種郵便物認可

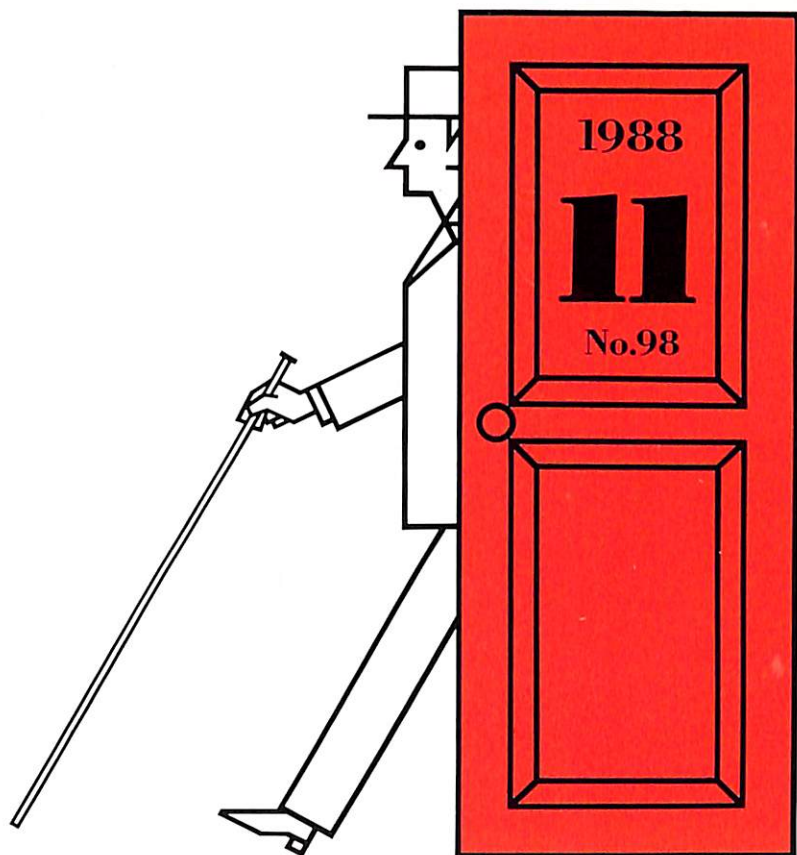
昭和六三年十月一五日

SSK通巻第一七三七号 (毎月六回、5の日、0の日発行)

視覚 障害

その研究と情報

特集＊盲人と造型芸術



ISSN 0385-7476

SSK



岩波書店

障害者は、いま

大野智也 著

障害者は何を望むか。彼らの自立を阻む壁は何か。ボランティア活動のあり方をどう考えるべきか。実情に詳しい著者が具体的に語る。

〈岩波新書〉 定価四八〇円

指と耳で読む

本間一夫 著

日本点字図書館と私―五歳で失明した著者が、点字図書館の必要を痛感し、私財を投じて東京に開設してから四十間の苦闘の跡を語る。

〈岩波新書〉 定価四八〇円

光に向つて咲け

粟津キヨ 著

斎藤百合の生涯―盲女性のためにもっと教育の機会を主張し、その実現に奔走した盲女性失業者の生涯を、その教え子が描く。

〈岩波新書〉 定価四八〇円

リハビリテーション

砂原茂一 著

リハビリテーションを、単に身体機能の回復訓練ばかりでなく、広く障害者の人権回復を求める思想と技術の体系としてとらえ直す。

〈岩波新書〉 定価四八〇円

障害をもつ育つこと

野村庄吾 著

いわゆる「障害児」も「健常児」も、生活と遊びのなかで理解を深めあい、ともに育っていく教育のあり方を訴えます。

〈子どもと教育を考える13〉 定価二二〇〇円

言葉を失いうこと

岩田 誠 著

神経内科医のカルテから―失語症の病因と回復についてやさしく解説。脳・神経系や言語に関心のある人も必読書。

〈NEW SCIENCE AGE〉 定価一〇〇〇円

町医者との戦後

松田道雄 著

町の小児科医として四十年、子どもや母親、老人など弱者とともに生きてきた著者は、差別をやめるのは知性人の義務だと訴える。

〈岩波ブックレット〉 定価二五〇円

人生の四季に生きる

日野原重明 著

半世紀にわたる内科医としての経験をもとに、生きる喜び、仕事と幸福、病い、老い、そして死などについて洞察する、滋味あふれる随筆。

B 6 判・定価一三〇〇円

目 次

1988年 11月 No98

2 ページ評論	村山 治江	2
特集 盲人と造形芸術		
手で見る美術展——触覚の美学で彩る日本の秋——	高橋 秀治	5
この人と語る		
視覚障害者の美術鑑賞	直居 鉄・西村 陽平	27
点字表記研究の変遷（4）	阿佐 博	41
インフォメーション・コーナー		51
編 集 後 記		66



視覚障害者と美術

手で見えるギャラリー・TOM館長 村山 治江

日本では、「国際化」という言葉が流行しているようですが、一体何をどう国際化するつもりなのかと、何人かの外国人にたずねられて、返答に困ることがしばしばです。国際化とは、まず自分の国の文化を国際的な立場、外からの視点で客観的に見ることから始まるのだと思います。そして、私がよく話題に出すのが、我が国の視覚障害者のすぐれた造型作品のことです。

日本文化を紹介するのに「歌舞伎」「能」「すもう」、そのほか、絵画・舞踊・音楽などなど、あらゆる分野で日本の伝統的、あるいは現代的な文化活動を海外で見ることができます。

しかし、それらをひっくるめて、私が自信を持って、諸外国よりすぐれたものと言えるのは、「盲学校生徒の造型作品」であるということ、それをどんなに私が声を大にして申し上げても、日本では一部の関係者をのぞいて、ほとんど耳をかそうとしないのは、ほんとうに残念なことです。

戦後まもない頃、人々がまだ豊かでなかった時から今日まで、盲学校の教師と生徒とが一体となって、ひたすらに創りつづけ、創るということの限りないよろこびを次々と生徒に伝えた業績が、その後の盲学校の美術教育の道標となったのです。この輝かしい事実は、ニューヨークやロンドンなどの主な点字図書館で見ることができます。そして、この十数年間、静かな波紋を広げていった各盲学校の美術活動は、日本の美術史の1ページにぜひ加えられるべきではないでしょうか？

「視覚障害者と美術とは無縁なもの」と思われがちですが、決してそんなことはないのです。

「手で見るギャラリー・TOM」は、今年で2回目の「全国盲学校生徒作品展」を9月3日より10月9日まで「16回リハビリテーション世界会議」と同時期に開催いたしました。

今回、視覚障害関係のほとんどの団体が主体になって、大きなイベントを組み上げました。これは、私の聞くところでは、前代未聞の歴史的な大事件だそうです。

「手で見るギャラリー・TOM」の今日までの5年間は、「彫刻を手で見る」という未経験な試みに対して、視覚障害者や晴眼者とともに、とまどいと恐れを感じながらも、多くの方々の協力に支えられながら、数々の企画展と移動展を催してまいりました。

そしてその間、私どもが常に残念に感じているのは、視覚障害者も晴眼者も基本的な触覚美術教育を幼年期から受けたことがないということです。

10年前から、パリのポンピドゥーセンター「子供のアトリエ」では、触覚教育に多くの知識を集めて取り組んでおり、その先進的な実験を、ぜひこのたびの共同企画展「瞑想のための球体」10月15日から11月27日までを見て、「触覚と美術」「手で見る」ということについて真剣に考えていただきたいと願っております。

盲学校の先生方の集りで、しばしば耳にするのは、生徒がどんなに造型を楽しみ、才能をのばすことができたとしても、将来造型作家として自立する社会的基盤のない日本では、美術を現在以上に重視したり、卒業後もつづけたりする上で、まわりの理解を得ることはとてもむずかしいという言葉です。全くその通りだと思いますが、アメリカでは盲人芸術家の自立のために、二つの大きな団体が組織され、精力的に活動して、すばらしい造型作品を生み出しているのです。障害者にかぎらずそれぞれの人々が、その才能を十分に発揮できるような社会であってほしいし、それが私どもの希望する21世紀の世界だと思うのです。

立ち読み版はここまでとなっております。

続きをお読みにになりたい場合には
社会福祉法人 視覚障害者支援総合センター
までお問い合わせください。

編集後記

「盲人と造形芸術——触覚フェスティバル'88」が、第16回リハビリテーション世界会議を機に、東京で開催されました。五つのイベントが同時に開かれたので、大きな反響を呼びました。ギャラリー・TOMのこれまでの実績に加えて、今回のイベントが、美術界や盲学校の美術教育に、また、盲人の美術鑑賞の環境に、よい影響をもたらしてくれることを期待したいものです。この催しについて、高橋秀治さんが、少ない紙数にもかかわらず、みごとにルポしてくださいました。意義や会場の雰囲気がわかっただけだと思います。さらに村山治江さんの2ページ評論、西村陽平さんと直居鉄さんの対談を併せて読んでいただければ、私たち目の見えない者でも見逃しがちな触覚による美的感覚の存在が、確かなものに映ってくるのではないのでしょうか。この灯を消さないようにしたいものです。

本誌 100 号記念の論文募集の〆切り期日が、10月末日に迫ってきました。まだ御応募されていない方は、規定（前号参照）を御一読の上、ふるって御応募ください。
(田中徹二)

視 覚 障 害	1988 年 11 月 No.98
年間購読料	3,000 円 (送料とも)
発行日	1988 年 11 月 1 日
編集人 (連絡先)	
日 本 盲 人 福 祉 研 究 会	
〒 166 東京都杉並区成田東 5 丁目 36 番 15 号	
電話 (03) 220-1421	
振替口座 東京 6-16103	
発行人	身体障害者団体定期刊行物協会
〒 157 東京都世田谷区砧 6-26-21	
印刷所	合同印刷株式会社
〒 130 東京都墨田区業平 2-9-13	
電 話 (624) 6111 (代表)	

協賛団体 日本点字図書館